

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

第二回

第二章 名門

1

私は、小奴こやつことつき合い始めた。葭町よしちようの置屋浜田屋はまだやの女将おかみであり、小奴の養母である亀吉かめきちが慶應義塾けいおうぎじゆくの私の寮りように挨拶あいさつに来たのである。

私が、小奴が犬に襲われるという危機を救ったお礼だという。尻はらだがこそばゆいとはこのことを言うのだろう。あれは私と原田はらだ、上野うえので企んだことだったからだ。偶然にも犬が飛び出してきて、馬が驚くことになったが、原田が雇い入れた替間男ほうかんは、なんの役にも立たなかった。

それに小奴は、私たちの悪だくみを馬上から見抜いていたというではないか。

小奴を浜田屋に送って行ったのだが、これきりの関係になるのは、

私としてもなんとも惜しい気がしていた。しかし所詮、芸者しよせんというのは、塾生である私とは別世界の人間であり、深迫いは禁物であると心した。私は、いたって慎重であり、臆病おくびような性格だが、それに加えて芸者とつき合うような金もない。川越かわごえの両親は、父が銀行の書記に雇われたとはいえ、かつかつの暮らしである。その中からいくらかの仕送りをしてくれているのだ。そんないわば爪つめに火を灯すともようにして捻出した金を芸者につき込んで、地獄に落ち、三世まで崇たられるだろう。

小奴は、そんな私の気がかりを察してか、自分が何とかするので会う機会を作りたいという。

小奴は、まだ十四歳である。私もまだ十八歳だが、小奴は四歳も年下である。しかし、私よりはるかに大人びているように感じる。すでに女としての色香もあるのだ。私を見つめる視線などは、身体からだの芯からどうにかなりそうなほど魅力的である。やはり住んでいる世界が違うのだろう。

小奴が、どうしても私と会いたいというなら拒否はしないつもりでいた。どのように私と関係を持つのか、私の方では動かず、見ていることにしたのだ。

すると、さほど時間を置かず、亀吉に連れられて塾に私を訪ねてきたというわけである。

粋な置屋の女将と美女の小奴が、男臭い寮を訪ねて来たのだから騒ぎが起きないはずがない。

もともと小奴に目をつけていた原田は、おおっぴらに「おい、桃介、美女がお出ましましたぞ」と険悪な顔を私に向ける始末だ。

寮監が出迎えると、その背後には物見高い寮生がずらり。

「ここに岩崎桃介というお方はおいででしょうか」

亀吉が口を開く。

小奴は、その後ろで、恥ずかしそうに顔を伏せている。大勢の男たちを前にして、一番心を惹く態度を心得ているのである。

「岩崎桃介はこの寮生であります」

寮監が答える。寮監もいつもと勝手が違う、緊張を含んだ戸惑いの表情をしている。

「こちらにおります小奴が危ないところをお助け頂いたお礼に参りました。本当にありがとうございます」

亀吉がゆつくりと頭を下げる。

「それはそれは、ご丁寧なことであります。浜田屋といえば、伊藤博文公なども御最賃にされていると伺っております。今すぐ桃介を呼んで参ります」

寮監は、背後に向かって「誰か桃介を呼んで来い」と叫んだ。

「ここにおります」

私は返事をした。実は、皆の背後で、なりゆきを眺めていたのである。こちらから待ってましたと出て行くのは浅ましいと思ったからだ。

小奴が顔を上げた。輝くような明るさだ。

私は、小さく手を挙げた。

「おい、色男、ちゃんと挨拶しろよ」

原田が背中を叩いた。

私は、ちよつとむつとした顔で原田を睨んだ。

「早くしろ」

寮監が苛立っている。

私は、多くの寮生の中を進んだ。この際、胸を張って歩くべきか、やや卑屈そうに遠慮気味に歩くべきか迷ったが、私らしく胸を張る方を選択した。

「岩崎様」亀吉がわずかに科を作りながら頭を下げた。「せんだつてはうちの小奴が危ないとところをお助けいただき、本当にありがとうございます。これは些少ですが、皆様のお口に合うかどうかと思ひ、お酒を持参いたしました。お菓子をお酒に合おうかと思ひ、殿方ばかりです。不作法とは思いつつもお酒にいたしました」

鮮やかな紫色の風呂敷をほどくと一升瓶の酒が現れた。灘の銘酒である。

「お気遣い申し訳ございません。ありがたく頂戴いたします」

私は、酒を受け取ると、寮監の顔を窺うかがい見た。寮監は、難しそうな顔をしながらも口元を緩めて頷うなずいた。無類の酒好きである。

「桃介兄さん、浜田屋にいらしてね」

小奴が恥ずかしそうに頬を染めた。私と二人きりの時は堂々と落ち着き払っていたが、いまはひどくしおらしい。

「俺も連れて行けよ」

原田がからかい気味に言う。

「行けるわけがないだろう。塾生の分際で」

私は真面目まじめに言った。

「まあ、そうだな」

原田はすんなり引き下がった。

「いずれそのうちに……」

私は、小奴と亀吉に答えた。

「たまに顔を見せてくださいませ。小奴が喜びますので。では失礼いたします」

亀吉は、軽く礼をすると、小奴を連れて帰っていった。

私は、二人のいなくなった玄関をしばらく眺めていた。

「のめりこむんじゃないぞ」

寮監が言い、酒を抱えて去っていった。振り向くと先ほどまでい

た塾生たちは、もはやいなくなっていた。

二

私は頻繁ひんぱんに小奴と会うようになった。

寮監からのめりこむなど注意されたのだが、それは私にはきかなかった。

私が東京に出てきて初めて恋した女性が小奴である。

これまで女性とは縁がなかった。私より年上の塾生や、見かけが老成している塾生は、吉原よしむらなどで女を買っていた。私も誘われたことがあるが、それだけではできなかった。女を商品のように扱うことは許されないと思っていた。単に童貞を卒業したいとか、性の処理をしたいとかいうのではなく、純粹に恋がしたいと願っていたのだろう。

こんなことを原田や上野たちにいうと、何を気取ってやがるんだと馬鹿にされるのが落ちだと思っただが……。

小奴は最初に出会った時からファム・ファタール、運命の女だと感じた。心の奥底おくそこで何かが私に囁ささやいたのだ。この女と一生、つき合うことになるぞって。

私は、これが恋だと思った。

小奴に会うために私は浜田屋に行った。金はないので、客としてではない。友人として行った。小奴の養母である亀吉は歓迎してくれたが、私の訪問が重なると、あまりいい顔をしなくなった。

亀吉は、小奴をいずれ一流の芸者に仕立て上げようと考えていた。小奴の美貌ひまうと機転のきく賢さからすれば十分に可能性のあることだった。そのために半玉はんぎやくになる時に小奴と名付けたのである。それは霞町界限かいわいで一流として鳴らした奴やつこという芸者にあやかった名前なのだ。

私に、浜田屋に訪ねてくださいねと言ったのは、あくまで社交辞令というものだろう。

実際に私が訪ね、それを小奴が喜んでいるのを見て、亀吉としてはあまりいい気がしなくなったのだ。小奴は、可愛い娘かわい同然であるが、いずれは政府の頭官けんかんに水揚げしてもらうことで浜田屋の後見人となつてもらわねばならないのだ。

置屋の商売としては、小奴はあくまで売り物である。商品である。可能な限り高く売らねばならない。それをどこの馬の骨とも分からぬ学生に取られるわけにはいかないのだ。

しかし小奴は自由である。賢い女性なので自分の立場は十分に分かっていると思うのだが、亀吉の思惑には左右されず私と会うことを選択した。

浅草あさくさに行きましよう、と小奴が言った。君は、成田山なりたさんの不動明王を信仰しているんじゃないのかい、と私は聞いた。

「浅草は女の神様でしょう。だから私たちはよくお参りするの」

浅草観音が女性かどうかは知らないが、あの優しい顔立ちを思えば、母のイメージがある。小奴が女の神様と思っているならそれでいい。

「行こう。実は行ったことがないんだ」

浅草は東京で最も人気のある場所の一つである。全国の老若男女が観音様に参拝する。参道は仲見世なかみせと言われ、小規模の商店がずらりと並び、土産物を買う客で溢あふれている。

私は学生とは思えない背広姿で、浜田屋の近くで小奴を待った。

私は、塾生の多くが着ている袴たかげたに高下駄たかげたという、いわゆるバンカラ姿を醜みにくいと思っている。薄汚れて汗臭くて不潔だ。西洋人が見てもいい印象は受けまいだろう。

それに口には出さないが、私には似合わないと思っている。そのため詰襟の洋装をあつらえたが、これもなんだか警官に間違えられそうで愉快ではない。そこで思い切って西洋人のような背広を新調してみたのだ。日本橋にできた洋服屋で作ったのだが、自分でも似合うと思っている。色は、シックなダークグレーだ。

小奴はどう思うだろうか。町には、背広を着ている日本人はまだ

珍しい。西洋人を相手に仕事をしている関係者くらいだ。福澤先生は、どういうわけかいつも着物である。西洋を日本に紹介した張本人であるのに西洋人と同じ恰好をするのを好まれないようだ。着物を着るのが、日本人としての矜持きやうじの表れだと思われるのだろうか。

この私の姿を見たらどのようなに思われるだろう。塾生らしくないと叱責しつせきされるかもしれない。心配しないこともないが、先生には、色々と注意を受けっぱなしであるのだから、今更背広の問題が一つ加わったとしても大したことはない。

小奴がやってきた。

彼女の周囲が輝いている。カラスの濡れ羽色と言うべき黒髪を髻まげに結び、雪よりも白い肌に真っ赤に彩られた小さな唇くちびるから白い歯が覗いている。

振袖から白い腕を露あらわにして、私に向かって手を振っている。着ている振袖は目にもあでやかだ。黄色地に赤い牡丹ぼたんの花が咲き乱れ、その中を金色の蝶が飛んでいる。帯は桜色に染められ、金糸銀糸がまるで春霞のようだ。

周囲の人々は、皆、小奴に目を奪われている。彼等、彼女等は全員が地味な茶か、くすんだ青の着物を着ているからだ。小奴だけが別の世界からやってきた異邦人のようだ。既婚の女性が歯を黒く染

める習慣は、西洋人の白い歯を見て、徐々に^{すた}廃れてきたとはいうものの、まだ多くの女性が歯を黒く染めている。小奴のあまりのあでやかさに気を抜かれたかのようにぽかんと口を開けている女性の黒い歯が見える。小奴の白い歯と対極をなしているのが、なんだが浮き立つほど楽しい。きっと彼女らは明日から歯を黒く染めるのをやめるだろう。その方が、ずっと女性を輝かせる。

「桃介さん、素敵だわ」

小奴は満面の笑みだ。

「背広を作ってみたんだ。似合うと言ってくれて嬉しいよ」

「桃介さんは、日本人離れた顔立ちと体形だから背広が似合うんだわ」

小奴が言う通り私は、いわゆるバタ臭い顔立ちだ。彫りが深く、目鼻立ちがはっきりしている。日本人に多いのっぺりした顔ではない。また体格も大方の人よりも頭一つ抜けている。それに特段の運動もしていないが、胸板は厚い方だ。日本人は、肉を食わず、まともな食事をしない歴史が続いた。そのため全体に背が低く、胸も薄い。私は、肉を食べたわけではないが、西洋人に近い顔立ちと体形に生まれたことが幸いだ。

「君こそ、素晴らしいよ。まるで太陽が地上に降りたみたいに輝いてる」

私は眩まがしさに目を細めた。私の絶賛まことに喜んだのか、小奴は振袖をくるりと両腕りょううでに巻き込み、身体を一回転させた。私は、今、いる場所が花畑はなはたけになったかのように錯覚した。

「行きましょう」

小奴が言った。私は葭町あしちから浅草あさくさまで歩くのは、何でもないと思っただが、小奴は、なんと今、流行はやりの人力車にんりきを頼たのんでいた。

私たちの前に黒い漆塗うるしぬりの人力車にんりきがやってきた。

「これで行くのかい」

「そう」小奴は私に右手を差し出すと、「乗せてくださいな」と言った。私は、多少、どぎまぎしたが、小奴の手を恭うやうやしく取ると、車に乗せた。私も小奴の隣となりに乗った。

車夫かじぼうが、梶棒かじぼうを「ようござんすか」とぐいっと持ち上げた。私は、身体が背後せがやにゆらつと揺れるのを感じた。これは寮せうで話題わだいになるかもしれない……。私の心もゆらつと揺れた。

三

浅草せんそうの観音くわんおん様さまで有名な浅草寺せんそうじは、一三〇〇年近くの歴史を持つという。

漁師すみがわが隅田川すみだがわで漁いしをしていると観音像くわんおんざうが網あみにかかったという。そ

れを祀る浅草寺はご利益があるということで、日本中からの参拝者を集めている。

毎日が祭りであるかのように、人でごった返している。

純粹に祈りを捧げる人ばかりではなく、多くは寺周辺の娯楽施設が目当てである。

「凄い人だね」

人力車を降りた私は、仲見世通りにうごめく人々にたじろいだ。

「何を驚いているんですか。毎日、こんな感じですよ」

小奴は、私の手を握ると引っ張って歩き出す。私たちは、人混みの中に入り込んだ。

参拝客は、華やかな小奴の姿に見とれ、遠巻きに取り囲む。まるで身体が触れてはいけないように人々が遠ざかるのだ。そのため私たちの周りには、不思議なことに静謐な空間が生じたのである。

私たちは、人の流れに逆らわず仲見世通りを歩く。軒を連ねる商店には、玩具、かんざし、喫煙道具、仏壇仏具、絵葉書、菓子、団子、甘酒……。ありとあらゆるものが販売されている。この場に販売されていないものはないかのようだ。

「何度か来たことがあるんだね」

「はい、お客様のお供をしてね」

小奴は、花火の店に立ち寄った。線香花火を手を取っている。

「それが欲しいの？」

私は、自分の所持金で十分購入可能なために財布を取り出そうとした。

「私、線香花火は好きじゃない。なんだか悲しくなるから。花火は、夜空に大きく、こうやって」小奴は、両手を大きく広げた。振袖が揺れた。牡丹柄が舞っている。それはまるで夜空に大輪の花火が広がったように美しい。「パツと花咲く方がいい。本堂に行って、早くお参りを済ませましょう」

小奴は私の手を掴むと、力を込めて引いた。

小奴は、早足で、人の流れを縫うように進む。私は、手を引かれ、その後続く。

浮足立つ……とはこういう気分を言うのだろう。あでやかな振袖の少女に引かれている背広姿の若者を、この人たちはいったいどのようなに見ているのだろうか。注目を浴びているのを実感する。それは恥ずかしさよりも心地よさだ。心がしびれる。

私は、新しく始まった明治という時代とともに生まれた。それまでの封建体制が崩壊したと同時に生を受けたのだ。それに何かしら運命のようなものを感じている。

身分制度の中で、息をひそめていた人々は新しい時代を迎えて、おもいきり背伸びをしようとしている。勿論、中には新時代への不もちろん

適合を起こし、没落していった者もいる。

この浅草寺の境内にも、まだ月代頭さかやきの男を何人も見かける。武士の世が終わったことを受け入れられないのだろう。

私は、彼らとは違う。新時代の波に乗る決意だ。そのためには東京に勝たねばならない。この生き馬の目を抜く東京の中に埋没せず、どうやれば存在感を示すことが出来るかを考え続け、行動している。善悪は問わない。誰よりも目立ち、認められなければ、私の前には道は開けない。

先日、私が仲間と共に企画運営した塾の運動会が開催された。

西洋では若者が、走ったり、跳んだりなどをして身体を鍛えるそうだ。若者たちが一か所に集まって、競い合う大会も頻繁に行われている。これを運動会と称するらしい。

そこで塾でも運動会をやるうということになり、私もその企画運営に携わった。

西洋の運動会の情報を集めて、見よう見まねで実施にこぎつけた。誰も専用の運動着を持っていない。走るにあたっても服装は自由である。袴に下駄で走る者もいれば、メリヤスのシャツで走る者もいた。

大々的に宣伝したから、福澤先生のご家族を含めて、多くの観客が集まった。

さて私かというと、友人に絵の上手い者がいて、彼に白のメリヤスシャツの背中いっぱいライオンが咆哮する絵を描いてもらったのだ。それは見事と評価すべきリアルさで、それを着ると、ライオンが真つ赤な口を開けて、今まさに人の頭に食いつかんとしているように錯覚するほどだった。

見事なものだ、と私は友人の画才に感心したのだが、友人は、本当にこれを着て走るのかと心配そうな顔をした。

私は、皆と同じ姿で走るのを良しとしない。目立ちたいということもあるが、これも処世術の一つである。

川越の田舎者であり、なんの後ろ盾もない私にとって、多くの観客が集う機会^{つど}は、自分を売り込むチャンスである。

勿論、これが吉と出るか凶と出るかは分からない。しかし東京という、新時代の最前線で人々が成り上がりたいうごめいている場所^{ところ}で生き残るには、尋常の手段では通用しないだろう。

私はこのライオンシャツを着て、徒競走に出場した。

塾生がスタートラインに立ち、一〇〇メートルを駆け抜けるのである。

スタートラインに立った時から、人々の目が私に注がれているのが痛いほど分かる。

ライオンだよ。

あのライオンはいったい何？

囁きは、徐々に大きくなり、徒競走の号砲がなる時には、ライオン、頑張れ！ という声援に変わっていた。

私は、期待に背かず一着でゴールした。この時、観客席から、ライオン、ライオンという大きな声援が木霊したのを快く聞いていた。

今、私は、小奴と共に浅草寺の本堂の前で手を合わせている。

周囲の人は、私より小奴に注目している。嫉妬心しっとしんが顔を出しそうになるが、私自身も小奴が白く小さな手を合わせている姿を、いつまでも見ていたい気持ちである。

私は無理をして目立とう、注目を浴びようとしているのだが、小奴は自ずと、人々の視線を集める天性があるのだろう。

「何を祈っているの？」

「内緒です」

小奴は唇にひとさし指を当て、微笑ほほえんだ。

参拝が終わり、私は小奴とともに緋色ひいろの毛氈もうせんが敷かれた縁台に座った。

屋台では茶と団子を提供している。

すぐに若い女性が盆に茶を二つ載せてやってきた。私は、団子を二人前頼んだ。

茶は薄く、香りもないが、喉のどを潤うるおすには十分だった。

「こんなことを聞いて失礼だけど、今の暮らしはどうなの？」

私は、茶を啜りながら聞いた。幼くして両親の下を離れ、芸者置屋の養女となる人生に同情を禁じ得なかったのだ。

「どういう意味？」

小奴の視線が鋭い。

「いや、あまりに僕と違う人生だから関心があったんだ」
少し動揺する。

「なにも？」小奴は目を伏せた。「なにも変わったことはないわ。お養母さんは優しく、私にいろいろなことを教えてくれる。もしここに来ていなかったら、私は貧しさの中で泣きながら暮らしていたんじゃないかと思う。ここで頑張れば、浮かび上がる機会がある」

「機会？」

小奴は今は半玉だが、芸者への道があるだけだ。機会というのは、資産家や政治家の庇護を受けることなのか？

「明治の新時代になって、男の人は機会を見つけて出世された方多いでしょう？ それまではお百姓だったのが、今では大資産家になっておられる方もある。女はその点、昔と同じ。中には学問されて立派になられている方もいるけど、良い男性と縁があれば、豊かな人生を歩んでいくことができる。男性次第の人生、それが女性の人生でしょう。私は、そんなのが嫌」

「嫌なのか。男に追隨ついでする人生は嫌なのか？」

「はい。自分の力で生きてみたい。もし可能なら、私の力で、男の人を世に出してみたい」

小奴は決意のこもった顔つきになった。

「不思議だな。君って」

「不思議かしら？」

「不思議というのが拙まちければ、新しいね」

私は微笑んだ。

「新しい女性ってこと？」

小奴が首を傾かしげる。

「そうだよ。自立して生きていきたいと考えている女性はあまりいないんじゃないかな」

「私は別に無理して自立したいって考えているわけじゃないの。でも父が商いに失敗すると、母まで一緒にダメになる。そして娘を手放さざるを得なくなるって悲しいでしょう？　こんな人生は送りたくないだけなの。桃介兄さんは？」

突然、質問を振られてしまった。小奴は、私より年下だが、はるかに過酷な人生を歩んでいる。しかしそんな暗さはみじんも見せない。私は、小奴を尊敬していた。

「僕は、何者になりたいか分からない」

私は小奴を見つめた。

「政治家？ 事業家？」

小奴が聞く。

「分からない。でも……」

私は小奴を再び強く見つめた。

「でも？ なあに？」

小奴は首を傾げる。

「あえて言えば、桃介になりたい、なるつもりだ」

私は強い口調で言った。

小奴が口に手を当て、堪えきれずに笑いを洩らした。

「おかしいかい？」

「桃介になりたいって！ 桃介兄さんこそ不思議な人だわ」

小奴は、声に出して笑った。周囲の人が、その明るい笑い声に誘われるように振り向いた。

「僕は君を尊敬する。僕と一緒に暮らすかい？」

私は真剣に言った。

「結婚しようってこと？」

小奴が小首を傾げた。不安とも疑うともつかない表情だ。

「そういうことになるかな？」

私は言った。

「桃介兄さんの奥さんになって、桃介兄さんを何者かにするのもしかもいけない」

小奴も真剣な表情になった。

私たちは、お互い見つめ合った。私の耳からは周囲の喧騒けんそうが消えていった。

私は、黙って小奴の手を取り、子供がするように小指を絡からめた。

「約束？」

小奴が聞いた。見つめる黒い瞳の中に私の姿ははっきりと映っている。

「……」

私は、何も答えず、絡めた小指を離した。急に不安を覚えたのだ。私は、臆病なのである。

四

「お前、小奴とつき合っているらしいな」

原田が私の部屋に入るなり、恨めしそうな顔で睨んだ。

「ああ、あれ以来な」

私は、逆らわずに正直に答えた。

「言っておくけど、塾生の方で芸者とつき合うのはどうかと思う

ぞ。お前と小奴が浅草でいちやついているのを見ていた奴がいるんだ。そのうち噂になって先生に叱責されても知らんぞ」

「叱責されても、小奴とつき合うのは止めんよ。俺の勝手だ。恋愛は自由だ」

私の答えのどこがおかしかったのか、原田は声を上げて笑った。

「何がおかしい」

私は憤慨ふんがいした。

「お前、あんな小奴とつき合っていて、いったい自分の将来をどう考えているんだ。足を引っ張られるだけだぞ」

「そんなことをお前に心配してもらう必要はない。それに心配するなら、笑うな」

私は、拳を握りしめ、原田の頬に近づけた。

「俺を殴るのか。殴るなら殴れ」

原田は顔をぐいっと突き出した。

「殴らん。お前を殴ったらこの拳が穢けがれる」

私は、拳を解いた。

「何が穢れると言うんだ。いずれにしても我々は学生だ。まずは学問ありきだ。その姿勢を忘れるな」

原田は、軽蔑けいべつしたような目で私を見た。

私は、小奴とつき合っている。小奴の立場や幼さを考えて、当然

ながら肉体関係はない。結ぼうとも思っていない。そんな俗物的な関係を超えて、私は小奴を尊敬している。一個の人間として見てやるのだ。私は彼女を、彼女は私を「何者か」にするために、お互いに尽くすのだ。

「小奴は、俺のファム・ファタール、運命の女なんだ」

私は言った。

原田が、さも訝いぶかし気な表情で「ファム・ファタール？ 小奴は運命の女と言うのか？ 魔性の女の意味もある。お前をとり殺すかもしれないぞ」と言った。

「ははは」今度は私が笑う番だ。「大丈夫だ。俺と小奴は似た者同士なのだよ」

「似た者同士？」

原田が首を傾げた。

「ああ、そうだ」

私は肯定したものの、どうして「似た者同士」という言葉がふいに口の端に上ったのか分からない。しかしこの表現は当たっている気がする。互いに惹かれあっているのは事実だ。それはお互いが似た者同士で、同じような匂い、そして運命の行く末を感じているからだろう。

「何が似ているんだ」

原田は、すこぶる機嫌が悪い。仕方がない。小奴に最初に目をつけたのは、原田である。私は、それを横取りしてしまったのだ。

「上手く言えない。しかし、似てる。金持ちとか、権力者とか、そんなものではなく、何者かになりたいと願っているところだと言っておこう」

私の答えに、原田は鼻で笑った。

「後で泣きを見るのがおちだ。あの世界の女たちは、男を籠絡するろうらくのが仕事だ。好きにしたらいい」

原田は言い、私の部屋から出て行こうとした。

「随分、盛り上がっているようだな」

戸を開け、酒井良明教師が入ってきた。さかいよしあき

原田といい、酒井教師といい、千客万来である。

「酒井先生！」

原田が、突然の酒井教師の登場に驚き、慌あわてて私を振り向いた。その表情には憐憫れんぴんが見えた。というのは、酒井教師が私を注意するために来たのだと理解したのだ。

浅草などで小奴と会っていた姿が目撃されてしまったのだろう。それ以来、塾生の私を見る目が変わってきた。嫉妬なのか、あるいは軽蔑なのか分からないが、道を外れかかっていると思っただ。それが酒井教師たちの耳に入り、そして福澤先生の耳にも入っ

たに違いない。

先生は怒っておられることだろう。私に退塾を命じられるかもしれない。

というのは福澤先生は、奥様であるきん様一筋の人であるからだ。現在の成功者は、例外なく愛人を数人持っている。これが成功者の甲斐性、あるいは社会的責任でもあるかのように平然と愛人を自宅に連れ帰り、夫人に世話をさせている。

当代きつての成功者である洪沢栄一しむさわえいいちしかり、安田善次郎やすただぜんじろうしかりである。さらに言えば政治家などで愛人のいない者を探すのが難しいほどだ。正式の夜会に、愛人同伴で出席するのも常態化している。中には欧米ではこれが普通だと嘯うそぶく者もいる。

安田善次郎は、もし本妻との間に子供が出来なければ、妾との間に子供をなしても構わないという家訓を制定していると聞いたことがある。家の存続を前提としている社会では、子をなさない妻は離縁されても文句が言えない。そのため成功者は、多くの愛人を抱え、子をなそうとする。それが理屈ではあるが、その裏でどれだけ多くの女性が泣いているか分からない。

私は、独身であり、どんな恋愛をしようと自由なはずである。しかし、先生からみれば半玉とはいえ、葭町の芸者とつき合っている私を許せないのだろう。

酒井教師は、私をどのように注意するのだろうか、私はいささか緊張した。

「原田、お前は席を外してくれるか」

酒井教師は、原田に言った。

「はい、了解であります」

原田は大げさも見える仕草で敬礼をした。そして私を見て、声には出さず、口だけを動かし、何かを伝えようとした。「ア・ト・デ・オ・シ・エ・ロ」と言っているように見えた。

私は、「バ・カ」と同じように口だけ動かし、返事をした。

原田は憤慨して、部屋を出て行った。

「まあ、そこに座れ」

酒井教師は、畳の床に胡坐あぐらをかいた。

私は正座だ。座り込んだ以上、じっくりと説教されるに違いないと確信し、覚悟を固めた。

「話がある。重要な話だ」

酒井教師は、私をじっくりと見つめた。

覚悟を決めたと言ったが、そういう時の私は、判断が素早い。酒井教師が、どう切り出そうかと悩まれるのを見るのも切ない。私はこちらから自分の考えを主張すべきだと考えた。

私は、毅然とした態度で、酒井教師を見つめた。

「私は、自分の意思で、自分の責任で、葭町の小奴とつき合っております。よからぬ噂を耳にされたのでしようが、私と小奴との間には不適切な関係はございません。お互いの人格を高め合おうという関係にすぎません。お互いが自立した人間としてつき合っておりま

す。確かに葭町で働く女性たちは社会的に不幸な境涯きょうがいにある者も多いのは事実です。しかし、小奴は……」

私は言葉を尽くしていたが、酒井教師の表情に困惑が浮かび始めた。

「ちょっと待て」

酒井教師が両手を前に突き出し、私の話を止めた。

「いったいなんの話だ？ 小奴とは何者だ？」

酒井教師は、驚いたように瞬まばたきもせず私を見つめた。

顔が赤らむのを感じた。拙い。私は、軽薄であると自任している。

それは演じている面もあるのだが、実は、粗忽者そこつもの、いわゆるおつちよこちよい、間抜けであった。酒井教師は、小奴との噂を耳にしないのだ。

「いえ、まあ、なんとか……」

私は口ごもった。

「まあ、いい。その話は、後でじっくり聞くとしよう。私が、ここに来たのは他でもない。桃介、お前、養子に行く気はあるか」

「はあ？」

今度は、私が驚く番だった。私は口をあんぐりと開け、酒井教師のいう「養子」の言葉が理解できなかった。

「驚くのも無理はない。君に養子の話があるんだ」

酒井教師の表情は真剣だ。むしろ深刻味を帯びているといっても過言ではない。

私は、ごくりと唾つばを飲み込んだ。今度は粗忽つぼではいけない。落ちて着いて答えねばならない。

「私は次男ですので、養子に行くのは差支えないでしょう。しかし昔から粉糠こなか三合持さんごうぢたら養子に行くなと言われております。私も養子に行くより、自分の力で世に出たいと考えております」

私はしっかりとした口調で答えた。

酒井教師の顔色が曇った。私の返事が芳しくないので残念に思っているのだろう。

私は、養子の話を拒否したもののどういう先からの話なのか、聞いてみたいとの気持ちもあった。

「養子がダメなら、嫁を貰う気はないのか」

酒井教師が言った。

「何を言うのですか。私は、まだ十八歳です。それに学生です。実家は貧乏です。生活できるはずがありません」

「養子もダメ、嫁を貰うのもダメなのか」

酒井教師の視線が強くなった。なにやら思惑がありげの様子だ。

「いったい誰が私などを養子に迎えようと考えたのか。また娘を私の嫁にしようと考えたのか。」

むらむらと好奇心が頭をもたげてくる。

「残念だな……」酒井教師は私をじっと見つめる。「しかし、今の世の中でひとかどの者になるには支援者が必要だ。明治の新しい世になり、十数年が過ぎた。この間、没落した者もいれば、大成功を収めた者もいる。一言でいえば、格差とでも言うかな。これがますます拡大している。成功者と失敗者を分けるものは何か。私にもよくわからないが、単に本人の努力だけではないことは確かである」

酒井教師は、元福井藩の士族であり、真面目で福澤先生の覚えも目出度い。難点は話が理屈っぽいことだ。

「酒井先生の話は分かりますが、いったい私のようなどこの馬の骨とも分からぬ者を養子にしようとか、娘を嫁に出そうとかいう物好きは誰ですか？ 教えてください」

私の質問に、酒井教師は、口角を引き上げ、にやりとした。

「誰だと思っ？」

「そんなの分かりませんよ。意地悪ですわね」

「話してやってもいいけど、養子に行く気がないんだらう？」

さらに口角を上げる。皮肉な笑いだ。嫌味な奴である。

「まあ、その通りですが、興味があるし、ことと次第によっちゃあ考えないでもありません」

私は、少し前向きな態度を見せた。私は、自分のことを軽薄才子であると任じている。それゆえに自立して、他者に束縛されずに暮らしたいとも思っている。しかし、ここまで酒井教師にもつたいぶられると興味を持たざるを得ないではないか。

「そうか、考えてくれるか。ならば明かそう」

酒井教師が私の方にくぐつと顔を突き出してきた。

胸の鼓動が自ずと高まった。いったい誰が私を認めたというのか。

「福澤先生だ」

酒井教師の口から、信じられない名前が飛び出した。

「福澤諭吉先生ですか？」

私は念を押した。

「そうだ。福澤諭吉先生、その人だ」

酒井教師が深く頷いた。

「冗談はよしてください。あり得ないでしょう。からかっているのですか」

私は、気分を害した。教師としてあり得ない冗談だ。糾弾に値する。きゆうだん

「冗談ではない。こんなことを冗談で言えるか。本当だ」

「私は、福澤先生から睨まれている最たる塾生ですよ」

私は自分を指さした。

睨まれているというのは本当だ。なんども注意され、退塾の命令さえ受けそうになったこともある。

ササガモリ

鈴ヶ森の刑場跡からしゃれこうべを掘り出したことが発覚し、塾生にあるまじき狼藉ろうぜきであると、福澤先生の逆鱗げきりんに触れたことがある。

さらにそれを反省せず、寮の食事の改善を要求し、調理場で破壊行為に及び、調理人をつるし上げたこともあった。

これにはしゃれこうべ事件以上に福澤先生は怒りに打ち震えた。食事に不満があれば、正規の手続きを踏んで改善要求すればいいものの、集団で調理場に乱入したのだから怒るのは当然である。

その破壊行為に及んだ集団のリーダーは私なのである。他の連中は、私の扇動たに焚きつけられただけである。理由は、面白そうだということだけだ。

若さとは破壊である。エネルギーの爆発、暴発である。これが若さの所以ゆえんである。訳知り顔に落ち着き払って道徳を説くなどというのは、ある意味では若さへの冒流ぼうりゅうである。私は、このような屁理屈を言い、集団を組織し、調理場の破壊行為に及んだのである。その結果、日ごろのもやもやはすっきりと晴れ、再び明日から頑張ろう

ではないかと若さのエネルギーが心身に充満していくのを感じることができた。集団を構成した他の塾生も同じ感想を抱いた。

しかし私の屁理屈は、福澤先生には全く通じなかった。激しい怒りを買っただけだった。

私たちは福澤先生から諄々じゆんじゆんと行為の非正当性、悪辣あくらつさについて諭された。福澤先生は、怒りに打ち震えておられたのだが、怒鳴ったり、体罰を加えたりされることはない。あくまで理と情に訴えるべく諭されるのだ。

これには参った。仲間全員心から謝罪した。

私はというと、謝罪を拒否した。自分がした行為について謝罪すれば、全てが水に流され、覆水盆ふくすいに返るわけではない。その事実を認めた上で、次の手を打つのが正しい反省であると思うからだ。

簡単に言えば、謝れば許してもらえるところなのは、甘えであるということだ。

しかし、私のこの考えも福澤先生には通じない。そこで謝罪を拒否するなら、退塾を命じるが良いかとまで言われたのである。

私を見守る仲間たちにも緊張が走った。私は、覚悟した。

「謝りません」

私は、言い切った。

「そうか……」と福澤先生は、さも悲しそうな表情を浮かべ、「部屋

へ戻ってよろしい」と言われた。

追って沙汰するということなのだろうと思った。

謝罪を拒否した私に対して仲間たちは尊敬、あるいはすぐに謝罪に転じた自分たち自身への羞恥、慚愧ともつかぬ表情で私を見つめた。彼らは、私が塾を出て行くのは間違いないと思っていたのだ。

ところが結局、退塾命令はなかったのである。

それが一転して、福澤先生の娘婿になる、すなわち養子となる話である。にわかには信じろというのが無理な相談だ。

「私も、なぜ桃介を養子にしようと思われたのか、その真意が分からなかったために先生にお伺いした。すると奥方のきん様が桃介がいいと言うのだ。それに長女のさと様も賛成されたいらしい。次女のふさ様の婿には桃介が相応しいと、二人がぞっこんなのだそうだ。

勿論、ふさ様も乗り気である。お前が運動会でライオンのシャツを着て走ったのに、えらくさと様が感激されたらしい。それで大人しいふさ様の婿には、お前のような元気な者がいいときん様に話された。きん様も同意され、福澤先生を説得したという次第だ」

「私の相手は次女のふさ様ですか？」

私はどんな女性だったか、思い出そうとした。

運動会の時の記憶、そして時折、塾生を招いて催される福澤家で

の会食の記憶……。

「そうだ。ふさ様だ。長女のさと様は、なかむらさだきち中村貞吉様に嫁がれているからな。ふさ様も十七歳におなりになり、婿を探しておられたのだ」

中村貞吉氏は、福澤先生好みの真面目、実直な方だ。私とは正反対である。

私は、混乱していた。退塾を命じられる可能性のあった男をなぜ、婿養子に迎えようとするのか。

ようやく、ふさを思い浮かべることができた。ふさは、活発で利発なさとの陰に隠れるようにしていた物静かな女性だった。ふつくらした顔立ちで、性格は控えめで、あまり強い印象はない。

人が振り返るほどの美少女である小奴と比較しようもないのは、事実である。

「こない話はない。お前は、アメリカ留学を希望しているようだな。だが、実家は、さほど裕福ではないと聞いている」

「はい」

私は、貧しさを素直に認めた。

酒井教師が言う通りで、私は川越の水呑み百姓の息子であると自認しているが、それは嘘ではない。今は、父が銀行の書記として採用されたおかげで生活は安定しているが、裕福というには程遠い。格差社会の最底辺から、少し上昇した程度だ。

「自力では留学は無理だ。留学すれば、道は大きく広がるが、そう

でなければ道は狭い。福澤先生は養子に来てくれるなら、留学させようとの心づもりでおられる。どうだね、これでもこの話を受ける気にならんか」

私は、考えていた。勿論、小奴のことだ。ふさと結婚すれば、小奴とは別れることになる。

私の考えを見透かしたかのように酒井教師が、「先ほど聞いた葭町の女のことを考えているのではあるまいな」と聞いた。

「いいえ」

私は嘘をついた。

「それならばいい。深い関係でなければさっさと別れ、忘れることだ。相手も紅灯の巷こうとうに生きる女だ。すぐにお前のことなど忘れる。

それが習いだからな。それに塾生の分際で葭町の女との浮名が福澤先生の耳に入れば、この話は流れることは間違いない。なにせ福澤先生はきん様一筋であられるからな」

酒井教師は、厳しい目で私を睨んだ。この話を断ることは許さないという目つきである。

「福澤先生は独立自尊を主張なさっております。それならば私が福澤の名前になることを潔しとされないのではないのでしょうか。もし養子になるならば、新しい一家を作りたいと思います。福澤と岩崎を合わせて岩沢という家はどうか。これなら実家の父母も

認めてくれると思います」

私は、粉糠三合持ったら養子になるなという格言まで持ち出した手前、最後の抵抗を試みた。

酒井教師が、不愉快そうに表情を歪めた。ごじやごじやと屁理屈を並べる男だ、と呆れているのだ。

「お前の言い分は分かった。福澤先生に伝える。それで養子の口は了解するんだな」

強い口調だ。

もはや進退極まった。剣でいえば、切っ先を喉元に突き付けられた状態である。

酒井教師は、もしこの話を断れば、私と小奴のことを福澤先生の耳に入れるだろう。そうなればこんどこそ退塾させられるのは間違いない。福澤先生の子煩悩振りこぼんのうは、塾生の誰もが知るところである。その愛嬢との縁談を断り、葭町の芸者との付き合いを選択したとなれば、顔に泥を塗られ恥をかかされたも同然だと思っだろう。

「覚悟を決めろ」

酒井教師が、さらに強い口調で言った。

「両親に相談……」

私の声が弱くなった。

「両親が反対するはずがないではないか。息子の出世が見えている

んだぞ。この話を断れば、お前の将来はない」

酒井教師の表情に、苛立ちが浮かんでいる。私の逡巡しゆんじゆんが理解できないのだ。

私は、軽薄である上に臆病である。その臆病さを隠すためにかえって派手な行動をとることがあるのだ。

選択肢は二つだ。ふさか小奴。どちらの道を選ぶか。それで大きく人生が変わるだろう。

ふさを選べば、私は、当代の偉人ともいえる福澤諭吉の娘婿として生きることになる。

留学し、西洋の知識を身につけ、明治という新時代を闊歩かっほできる可能性が格段に高くなる。

一方の小奴を選択した場合はどうか。小奴と夫婦になれる可能性は少ない。彼女をめとるには、置屋に相応の金を積まねばならないだろう。その金はない。また小奴が、そのことを望んでいるかどうかも分からない。彼女は、あの世界で一流になろうとする自立心の強い女性だ。私がいなくても生きていけるだろう……。

私は考え、考え抜いた。

しかし結局は、留学と福澤諭吉を後援者に得ることに、どれだけ納得できるか、その理由を考えていただけだった。

「分かりました。お受けします。その代わり留学の件はよろしくお

願います」

私は酒井教師に頭を下げた。

臆病で慎重な私だが、養子に行くことを決断した。

この瞬間に小奴との関係を切ることも、渋々ながら決断した。そして小奴の前から、このまま静かに消えていくことにしたのである。

卑怯者、臆病者の人生の選択である。

こんな選択は、人生には往々にしてあるものだ。私はざわめく自分の心を納得させた。

〈つづく〉